

日本語の法助辞「ダロウ」の統語的特徴
—モダリティの統語論のために—

主濱 祐二

1 はじめに

本稿では、日本語のモダリティを表わす一形式である法助辞の統語的特徴について、日英語のテキストの調査に基づく記述的な観点、また生成文法理論の枠組みによる理論的な観点の両面から考察する。具体的には、法助辞「ダロウ」を取り上げ、その統語的特徴の分析を試みる。(1)に、小説等から集めた「ダロウ」の用例を示す。

- (1) a. 言葉の羅列にしか捉えられなかったに違いなかつただろうけれど、・・・
b. おそらくそうしたニュアンスをもつだろう作品として、・・・
c. 「大坂でも、諸国の牢人衆へ、手をまわしているらしいな」

「……だろうな、大きな声ではいえねえが、徳川様だって、・・・」

(小説等からの抜粋、下線部は筆者による)¹

一般に、文の意味は、文が描写する状態や行為などの「命題」を表す部分と、命題に意味的な増減は与えずに、それに対する話し手の心的態度（判断、推測、聞き手への伝え方など）を表す部分に分けられると考えられており、(益岡 1991, 中右 1994 など)、特に後者を表す文法形式をモダリティ（あるいはムード）と呼ぶことがある。² 日本語には、(2)に示すように、少なくとも3種類のモダリティ形式があることが知られている。

(2) a. 述語の活用形——ル形とタ形

b. ル形・タ形に続く助動詞的表現

c. 終助詞（カ、ヨ、ネ、など）、陳述副詞（絶対、きっと、多分、など）など
(加藤・福地 1989: 113)

本稿で取り上げる「ダロウ」は、(1)aの「違いなかつただろう」およびbの「ニュアンスをもつだろう」からも明らかのように、(2)bの「ル形・タ形に続く助動詞的表現」に分類される。(2)bには、「ダロウ」の他に、「ハズ(ダ)」「カモシレ

ナイ」「マイ」などがある。本稿ではこの分類に属する「ダロウ」を中心に議論を進めるが、「ダロウ」と文法的な関係の強い(2)cの陳述副詞にも言及する。

(2)aのル形とタ形については、「(親が子供に) いつまでも遊んでないで、早く片付ける」「(店員が客に) 3パックで千円だよ、さあ買った買った」のような例があると思われる。また、(2)cの終助詞も、統語論の観点から最近注目を集めており(遠藤 2010 など)、非常に興味深い研究対象であるが、本稿ではこれらは扱わず、稿を改めて論ずることとする。

本稿の構成は、次の通りである。第2節では、日本語のテキストに現れる「ダロウ」の調査をもとに、それが生起する統語環境について観察し、また英語訳との比較も行う。第3節では、生成文法の枠組みで「ダロウ」を統語論的に分析し、その構造を示す。第4節では、本稿の考察をまとめ、今後の課題について述べる。

2 法助辞「ダロウ」に関する調査

理論的な分析に入る前に、この節では、日本語のテキストとその英語訳を対象とした調査をもとに、実際に法助辞「ダロウ」がどのように現れるか観察し、また、英語で対応する表現との比較を行う。

日本語の法助辞「ダロウ」の現れる統語環境と、それに相当する英語表現との対応関係について、小規模ながら以下の調査を行った。³ 調査には、プラトン著『メノン』の日本語訳(藤沢令夫訳、岩波文庫、1994)と英語訳(Grube 訳、Hackett 社、2002)および村上春樹著『1Q84 BOOK 1 (4月-6月) 前編』(新潮文庫、2012)とその英語訳(Rubin 訳、Harvill Secker 社、2011)を用いた。『メノン』は冒頭の147行、『1Q84』は冒頭の153行をそれぞれ取り上げ、テキスト中に「ダロウ」(「デショウ」含む)がどのように現れ、また英語訳ではどのような表現に対応しているか調査した。

まず、(3)に「ダロウ」の出現数を示す。

(3) 法助辞「ダロウ」の出現数

	メノン	1Q84
ダロウ	19 (30)	10 (20)

(() 内の数字はル形・タ形接続助動詞の総数を示す)

両作品に共通して、モダリティを表すル形・タ形接続助動詞のうち、「ダロウ」が最も多く用いられていた。『1Q84』よりも『メノン』で、「ダロウ」を含む助動詞

が多く用いられているが、この原因は語りのスタイルの違いにあると思われる。小説『1Q84』では、登場人物が会話を交わす部分もあるが、それ以上に登場人物が関わる出来事や状況を、客観的に描写する部分が多い。一方『メノン』は、テキストが全て登場人物の会話で成り立っているため、話し手の主観や心情がテキストに反映され易いと考えられる。

2. 1 法助辞「ダロウ」の統語環境

次に、「ダロウ」が出現する節や文のタイプについて、(4)に示す。

(4) ダロウの統語環境①：節・文のタイプ

	メノン	1Q84
I 主節	16	7
a. 平叙文	8	1
b. 疑問文	8	2
(i) Yes/No 疑問文	7	1
(ii) Wh 疑問文	1	1
c. 感嘆文	0	4
II 従属節	3	3
a. ダロウ+接続詞	3	0
b. ダロウ+補文標識「ト」	0	3

(4) I・IIの数値から、「ダロウ」は従属節でなく、専ら主節で用いられる法助辞であり、またIのa, b, cからは、2作品で数値に差はあるものの、平叙文だけでなく、疑問文や感嘆文でも頻繁に現れることが分かる。⁴ IIの従属節については、数は少ないが、aには接続詞「～シ」「～カラ」が、bには補文標識「ト」を含む「～ダロウと(文末)」「～ダロウ、と不思議に思った」が含まれる。以下(5)に、(4)の分類のうち特徴的な例を5つ示す(『1Q84』からの例は「Q」、『メノン』からの例は「メ」で示す)。

(5) a. たぶん個人タクシーなのだろう。(Q; 主節・平叙文)

b. 男には男の徳があり、女には別に女の徳があり、・・・というふうを考えるのは、ただ徳の場合だけなのだろうか。(メ; 主節・Yes/No 疑問文)

c. いったい何度、同じ台詞を聞かされただろう。(Q; 主節・感嘆文)

- d. しかし, [たぶんあの人なら知っていることだろう] U, … (メ; 従属節・ダロウ+接続詞)
- e. しかし [なぜ, その音楽がヤナーチェクの『シンフォニエッタ』だとすくにかくわかったのだろう], ト青豆は不思議に思った。(Q; 従属節・ダロウ+補文標識「ト」) (下線, 角括弧および囲み線は筆者による)

続いて, 「ダロウ」と共起する表現や前後の接続関係などについて, (6)に示す。

(6) ダロウの統語環境②: 共起表現と接続関係

	メノン	IQ84
I 条件文の帰結節に出現	3	0
II 陳述副詞との共起	8	1
III 前方接続: a. 述語のル形・タ形+ダロウ	12	3
b. 形式名詞+ダロウ	5	7
c. 助動詞+ダロウ	1	0
d. Wh 語+ダロウ	1	0
IV 後方接続: a. ダロウ+φ (文末)	8	6
b. ダロウ+終助詞	8	1
c. ダロウ+接続詞	3	0
d. ダロウ+補文標識「ト」	0	3

(6) Iの「条件文の帰結節」とは, 「(もし) p ならば, q である」(If p, then q) の後件「q である」に当たる部分のことである。IIについて, 「ダロウ」と共起する副詞「キット」「タブン」などは, 疑問文には現れず, 平叙文中でのみ観察された。これは, (7)に示すように, 日本語・英語を問わず, 話者の主観的判断を表す要素は, 疑問の作用域に入りにくいことが原因であると考えられる。

(7) a. *Did Frank probably beat all his opponents? (Jackendoff 1972: 84)

- b. {*絶対/*多分/?ひょっとして} 次郎は道江に恋していたのですか?

(澤田 1978: 20) (下線は筆者による)

IIIとIVの, 「ダロウ」の前後の接続について特筆すべきなのは, III前方接続の b 形式名詞「ノ」「コト」である。「ノダロウ」は, 両作品で合わせて10例, 「コト

ダロウ」は2例あったが、「ノダロウ」は10例中9例が疑問・感嘆文に、「コトダロウ」は2例どちらも平叙文に現れていた。「ノダロウ」の「ノ」(口語では「ン」)は、(8)に示すように、疑問文や感嘆文では必須要素として現れる。

- (8) a. 太郎はどうして来ない {の/ん/*こと/*φ} だろう (か) ? <疑問>
 b. この花はなんて美しい {の/ん/*こと/*φ} だろう ! <感嘆>

以下(9)に、(6)の分類のうち4つを取り上げて示す。

- (9) a. いまのような問をかけるつもりになってみれば、[それがわかるだろう]。
 (メ ; 条件文の帰結節)
 b. むろん君の意見は、彼と同じだろうからね。(メ ; 陳述副詞との共起)
 c. どうしてこんな簡単なことができないのだろう? (Q ; 形式名詞+ダロウ)
 d. 『シンフォニエッタ』という音楽が私にこの不可解な感覚をもたらしているのだろうか。(Q ; ダロウ+終助詞)

以上、法助辞「ダロウ」が現れる統語環境について、『メノン』『1Q84』における用例をもとに観察してきた。「ダロウ」の統語環境は、次の4点にまとめられる。①主節にも従属節にも現れるが、専ら主節に現れる。②平叙文、疑問文、感嘆文など、様々な種類の文に現れる。③平叙文で、陳述副詞と共起する。④用例で確認できた限りでは、下の(10)に示す前後の接続関係が示されうる。⁵

- | | | | | | |
|------|---------------------------------------|---|---------|---|----------------------------------|
| (10) | Wh 語
+ 述語のル形・タ形
+ 助動詞
+ 形式名詞 | } | + ダロウ + | { | φ (文末)
接続詞
+ 終助詞
+ 補文標識 |
|------|---------------------------------------|---|---------|---|----------------------------------|

2. 2 法助辞「ダロウ」と英語におけるその対応表現

ここで、法助辞「ダロウ」の表す意味が、英語訳テキストではどのような表現に対応しているか見ていきたい。キャアコップチャイ(2010)の「ダロウ」の用法の分類に基づき、本稿の調査で観察された①推量、②疑念、③感動の3用法について、以下この順に英語との対応について見ていく。⁶

- ① 推量は「ダロウ」の最も基本的な用法で、例えば「p だろう」は「命題が確

定的である(真である)と、想像の世界において認識する」のように解釈される(三宅 1999)。この用法の「ダロウ」のうち2例と、その英語訳を(11)に示す(「ダロウ」に対応する英語表現に下線を付してある)。

- (11) a. むろん君の意見は、彼と同じだろうからね。(メ) : … for surely you share his views.
 b. たぶん個人タクシーなのだろう。(Q) : The driver probably owned his own cab.

(11)以外の例では、will, would, perhaps, possible, probably が観察され、様々な品詞により推量の意味が表されていることが分かった。

(11)で特徴的なのは、英語では副詞1語のみ(surelyまたはprobably)が現れているのに対し、日本語の例では副詞「ムロン」「タブン」と法助辞「ダロウ」が共起している点である。もちろん英語でも、“His new novel will possibly come out next month.”のように、副詞が助動詞と共起することはあるが、「ダロウ」と副詞との共起はかなり頻繁に観察される(キャアコップチャイ 2010, p. 162)ので、これを「ダロウ」の統語的特徴の一つとして捉える必要があると思われる。

② 疑念の「ダロウ(カ)」は、推量とは多少異なり、「命題が不確定である(真偽が定められない)と、想像の世界において認識する」という用法であり、「不定推量」と呼ばれることもある(三宅 1999)。日本語の例2つとその英語訳を、(12)に挙げる。

- (12) a. そして徳は、・・・何か少しでも異なっているだろうか? (メ) : And will there be any difference in the case of virtue, ...
 b. どうしてこの運転手はラジオで交通情報を聞かないのだろう、と青豆は不思議に思った。(Q) : She wondered why the driver was not listening to traffic reports.

この用法の「ダロウ(カ)」に対応する英語訳の多くは、Does it ~? や How did she ~? などの疑問文で、「ダロウ(カ)」が従属節にある場合は(12)bのように wonder + wh 句が用いられていた。(11)のように、推量の意味を担う probably などの表現は現れないが、これはこの種の表現は疑問文に現れにくいことによる(2. 1節の(7)を参照)。従って、限られたデータの範囲ではあるが、疑問文と

3 法助辞「ダロウ」の統語構造

この節では、第2節での調査で得られた知見を生かしつつ、法助辞「ダロウ」の統語構造について、生成文法の枠組みで分析を試みる。

3.1 日本語の文構造

まず、井上(1976)を出発点として、最近のミニマリスト・プログラムの考え方も応用しながら、日本語の文の必須要素と基本的な成り立ちについて確認していきたい。下の、井上の例(15)を見てみよう。

(15) a 太郎が序文を翻訳し b てい c る d だろウ e ね。 (井上 1976: 5)

井上は a を「文の核」と呼び、a では名詞句「太郎」「序文」と述語「翻訳する」の間に、主語・目的語という文法関係が保たれている。a には述語の項構造（ここでは hon'yaku-suru <agent, theme>）と、発話の中心的な命題が示される。統語構造上は vP として具現化される。

b はアスペクト形式素、c は時制辞と呼ばれ、それぞれ a が表す出来事が継続中なのか、完了済みなのか、あるいは現在のことなのか、過去のことなのかを指定する。アスペクト形式素は種類が多く、「～テイル」以外にも「～テシマウ」「～カケル」などがあるが、一方で時制辞は「ル」と「タ」の二種類しかない。アスペクト形式素も時制辞も、単独で述語として使われることはないため、統語構造上は（語彙範疇ではなく）機能範疇として位置付けられ、それぞれ AspP と TP の主要部に生ずると考えられている。

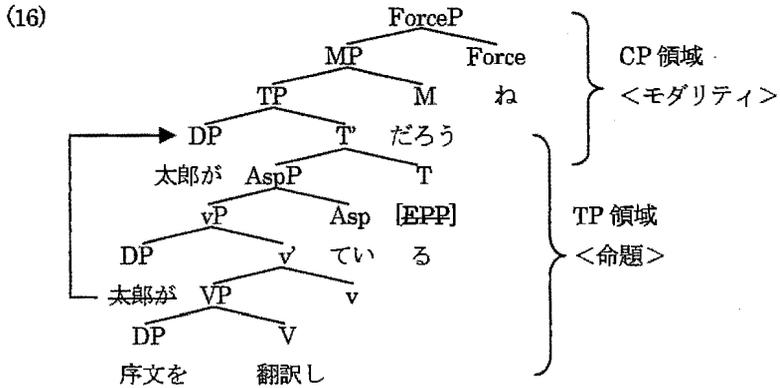
d は法助辞で、a から c で表された命題内容に対する話し手の判断などを表す。e は終助詞で、疑問・問いかけ・命令など、聞き手に対する働きかけを表す要素で、「か」、「ね」、「ろ」などがある。

a, b および c は統語構造上 TP かそれより下の領域に現れるが、d と e は CP 領域に現れると仮定されている(Koizumi 1993)。例えば法助辞「ダロウ」は、ル形・タ形に接続し「～する／したダロウ」の形で用いられ、それ自体には時制辞が付かない（例：*ダロウタ）ため、TP を補部とし、MP (Modal Phrase, 法助辞句)の主要部として CP 領域に現れると考えられている。また、終助詞には発話行為を表す機能があることから、Rizzi (1997)の多層的 CP 構造でいう ForceP に生じるものと考えられる。

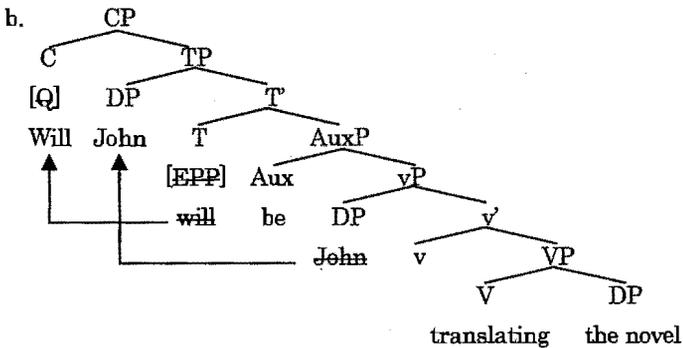
以上の説明に基づくと、(15)の文の統語構造および派生は(16)のように示され

る(移動は矢印→, 削除は取り消し線で表す)。ここでは三原・平岩(2006)に従い, 対格は v, 主格は T により付与され, T の持つ EPP 素性により, TP 指定部へ DP 移動が誘発されると考えておく。⁷

比較のために, 英語の文構造の例を(17)に提示する。派生の詳細には立ち入らないが, 助動詞的要素に関して言えば, (16)では「ダロウ」が CP 領域の MP に現れるのに対し, (17)では will が TP の主要部に基底生成している。英語の助動詞には, 疑問文などの派生で主要部移動が課される点も, 日本語の法助辞とは大きく異なる点である。



(17) a. Will John be translating this novel?



3. 2 法助辞句の階層構造

モダリティを担う CP 領域の範囲を(16)に示したが、この領域には、より豊かな階層構造が含まれることが、上田(2007)により論じられている。モーダル (モダリティを担う文末形式のこと) に認識モーダル (「ダロウ」「マイ」など) と発話伝達モーダル (禁止「ナ」、勧誘「マシヨウ」など) の2種類を認める先行研究をもとに、上田は前者が Epistemic-modal Phrase (E-modalP)、後者が Utterance-modal Phrase (U-modalP)として CP 領域にそれぞれ独立した投射を成す、(18)の階層構造を仮定している。

- (18) a. 主文構造 : [U-modalP [E-modalP [TP [vP ...] ...] E-modal] U-modal]
 b. 埋め込み構造 : [E-modalP [TP [vP ...] ...] E-modal]

上田は、モーダルの人称制限や題目の生起と、それらの従属節への埋め込みとの関係についてのテストをもとに、(18)の構造の妥当性を検証している。以下、特に「ダロウ」の人称制限と埋め込みの例を取り上げ、上田の主張を確認する。

認識モーダル(E-modal)の「ダロウ」には、(19)に示すように、主語に一人称と三人称は許容するが、二人称は許容しないという性質があるが、埋め込み文((20)では逆接の「ガ」節)では二人称の主語も許容され、人称制限がキャンセルされているように見える。

- (19) a. きっと、{僕/*君/彼}は行くだろう。 (上田 2007: 270)
 b. *君は明日彼女を叱るつもりだろう。 (仁田 1989: 38)
 (20) a. きっと、君は行くだろうが、僕は行かない。 (上田 2007: 271)
 b. [君は明日彼女を叱るつもりだろう]が、その前に少し話を聞いてやってほしい。

認識モーダルは「ガ」節に埋め込み可能であるが、発話伝達モーダル(U-modal)は埋め込みが不可能である。

- (21) a. *あっち行けが、行かない。(命令)
 b. *一緒にたべましょうが、食べない。(誘いかけ: 勧誘) (上田, 同上)

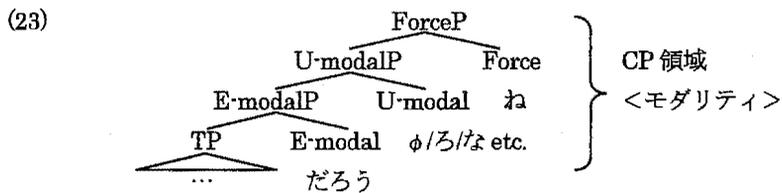
上田はこの事実から、埋め込み節は U-modalP を欠く E-modalP までの構造であ

り、他方(19)のような主文は E-modalP と U-modalP の両方を含む二層構造であると考え、主語の人称制限に関与するのは(「ダロウ」などの E-modal 自体ではなく)主文の構造に現れるゼロ形式の U-modal であると仮定した。例えば、(19)a と(20)a の構造は、それぞれ(22)a, b のように表すことができる。

- (22) a. *[U-modalP [E-modalP きつと [TP 君は行く] だろう] ϕ]。 (人称制限あり)
 [+2nd].....*.....[-2nd]
- b. OK[[E-modalP きつと [TP 君は行く] だろう] が], … (人称制限なし)
 [+2nd]

(22)a は E-modalP と U-modalP の 2 層構造の主文で、ゼロ形式 (ϕ で表示) の U-modal に主語の人称指定[-2nd]があるため、二人称の「君」が共起できない。しかし、(22)b の「ガ」節は U-modalP を欠く構造なので、U-modal による人称指定は一切ない。

以上、上田(2007)の議論に沿って、CP 領域に現れると考えられる複数のモーダルの投射について見てきた。この節での説明を(16)の文構造に反映させると、(23)のように表すことができよう。



4 まとめと今後の課題

以上、本稿では、法助辞「ダロウ」の統語的特徴について、日英語テキストの調査に基づく記述的な観点から、そして生成文法の枠組みで理論的な観点から、考察を行った。テキストの調査は小規模であったが、「ダロウ」の生起する統語環境や接続関係などの傾向を捉える事ができた。理論的には、「ダロウ」が日本語の文構造の中でも、モダリティを担う CP 領域に位置づけられること、また、上田(2007)による人称制限と埋め込みのデータから、「ダロウ」は E-modalP に、そしてもう一つ上の階層の U-modalP が人称制限に深く関与していることを確認した。

今回は、「ダロウ」をはじめとする法助辞が関わる個別の統語現象の分析には入

ることができなかった。冒頭で挙げた「ダロウ」の例(1)に、今後問題となる現象が含まれているので、ここでもう一度見てみよう。

- (1) a. 言葉の羅列にしか捉えられなかったに違いなかっただろうけれど、・・・
 b. おそらくそうしたニュアンスをもつだろう作品として、・・・
 c. 「大坂でも、諸国の牢人衆へ、手をまわしているらしいな」
 「……だろうな、大きな声ではいえねえが、徳川様だって、・・・」

(1)a では、タ形の連続と助動詞的表現の順序を統語構造でどう捉えるかが問題で、特にタ形については全て時制とする立場(井上 2009)と、アスペクトとして捉える立場(三原 1992)がある。bの「・・・だろう作品」の部分は関係節で、このような関係節の構造とモーダルの生起についてはすでに Haraguchi and Shuhama (2012)で扱っているが、より詳細な分析が必要である。cの「……だろうな」は省略文で、特に法助辞が残留しているので、Shuhama (2012)ではこれを法助辞補部削除 (Modal Complement Ellipsis, Aelbrecht 2009)と捉え分析を行ったが、これについても研究の余地がある。取り上げるべき現象や構文は他にもあるが、稿を改めて分析を試みることにする。

註

- (1)a, b, cの各例の出典は次の通り：稲子次郎『一度だけの「浜辺の歌」』、小沼純一『武満徹：その音楽地図』、吉川英治『宮本武蔵 火の巻』
- ここで述べたモダリティの解釈は、日本語学に特有のモダリティ観に依拠しており、欧米の言語学におけるモダリティの捉え方とは性質が異なる。例えば、法助動詞の分析を中心とする英語のモダリティ論では、能力や義務などの根源的モダリティや、可能性や必然性などの認識様態的モダリティはモダリティに含まれるが、命令などの発話行為は普通モダリティには含まれない。日本語学ではこのような発話行為的な意味も「モダリティ」の構成要素とされ、「発話態度のモダリティ」と呼ばれることがある。本稿では、この日本語学に依拠したモダリティの捉え方に依拠して議論を進める。日本語と英語のモダリティ観の相違については、湯本(2004)を参照。
- 本調査は、井上(2009)による日英語の接続要素の調査方法に倣って行った。
- 「ダロウ」が現れる文の種類は、下の(i)のように、表面的には疑問文なのか感嘆文なのか区別しにくい場合がある。

(i) 結婚して以来、夫と何回喧嘩しただろう。(庵他 2001: 244)

そのため、本調査では、文脈から対象文の意味を解釈し、疑問文か感嘆文かを判断することにした。

- 5 (10)における“+”記号は、それより上の形式に後接しうることを示している。例えば、下の例の下線部では、「Wh 語+述語のル形+助動詞+形式名詞+ダロウ+終助詞+補文標識」という接続が見られる。

(ii) 太郎は、花子とどこで会うべきなのだろうか、と悩んでいた。

- 6 キャアコップチャイ(2010)は、小説8作品中に現れる「ダロウ」の詳細な分析に基づき、「ダロウ」には①推量、②確認、③疑念、④婉曲的質問、⑤感動の5用法があると論じている。
- 7 T が解釈不可能な EPP 素性を持ち、その認可のために、名詞句の移動や虚辞の挿入により TP の指定部を音形のある要素で満たす必要性が生じる、と仮定することで、例えば(iii)に示す ECM 構文の John の移動の理由が説明できるなどの利点がある。

(iii) Mary believes [_{TP} John [_T to [_{VP} ~~John~~ be innocent]]]

しかし、田中ら(2000)も指摘するように、EPP 素性がなぜ存在するのかについてはまだ十分な説明がなされておらず、議論の余地が残されている。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語 (上)』大修館書店
- 井上和子 (2009) 『生成文法と日本語研究—「文法」と「談話」の接点』大修館書店
- 上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」, 長谷川信子 (編) 『日本語の主文現象: 統語構造とモダリティ』, 261-294, ひつじ書房
- 遠藤喜雄 (2010) 「終助詞のカートグラフィー」, 長谷川信子 (編) 『統語論の新展開と日本語研究: 命題を超えて』, 67-94, 開拓社
- 加藤泰彦・福地務 (1989) 『テンス・アスペクト・ムード』外国人のための日本語例文・問題シリーズ 15, 荒竹出版
- キャアコップチャイ スィラッサナン (2010) 「「だろう」の意味・用法—小説における分析」『日本語/日本語教育研究』1, 157-176, 日本語/日本語教育研究会

- 澤田治美 (1978) 「日英語文副詞類(Sentence Adverbials)の対照言語学的研究—
Speech act 理論の視点から—」『言語研究』74, 1-36, 日本言語学会
- 田中伸一・阿部潤・大室剛志 (2000) 『入門生成言語理論』ひつじ書房
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店
- 仁田義雄 (1989) 「述べて立てのモダリティと人称現象」『阪大日本語研究』第1号,
31-62, 大阪大学文学部日本文学科
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』日英語対照研究シリーズ1, くろしお出版
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造 ミニマリストプログラムとその
応用』松柏社
- 三宅宏宏 (1999) 「モダリティとポライトネス」『言語』6月号, 第28巻, 第6
号, 64-69, 大修館書店
- 湯本久美子 (2004) 『日英語認知モダリティ論—連続性の視座』くろしお出版
- Aelbrecht, Lobck (2009) *You have the right to remain silent: The syntactic
licensing of ellipsis*. Ph.D dissertation. Catholic University of Brussels.
- Haraguchi, Tomoko and Yuji Shuhama (2012) 'On the Cartography of
Modality in Japanese,' *Online Proceedings of GLOW in Asia Workshop for
Young Scholars 2011*, 102-110, Mie University.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*,
Cambridge, MA: MIT Press.
- Koizumi, Masatoshi (1993) 'Modal Phrase and Adjuncts,' Patricia M. Clancy
(ed.) *Japanese/Korean Linguistics 2*, 409-428.
- Rizzi, Luigi (1997) 'The Fine Structure of the Left Periphery,' Liliane
Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: A Handbook in Generative Syntax*,
281-337, Dordrecht: Kluwer.
- Shuhama, Yuji (2012) 'Modal Types and Applicability of Syntactic Operations,'
a paper presented at SinFonIJA 5: the 5th Conference on Syntax,
Phonology and Language Analysis, University of Vienna, 27-29 Sept.
2012.
- (岩手大学大学院教育学研究科 2006 年度修了生、鶴岡工業高等専門学校
総合科学科)